

被災地復興における映画上映会の役割

石垣尚志（東海大学）

Keyword：映画上映、被災地復興、地域コミュニティ

【問題・目的・背景】

1. 背景

東日本大震災から8年が経過し、産業や生活に必要な施設の整備が進められてきた。岩手、宮城、福島ではほぼ全ての災害公営住宅（復興住宅）が完成し、仮設住宅に住む被災者はピーク時の約3%になったといわれている（時事通信社2019）。しかし、街の基盤が作りなおされるなかで、その街に住む人びとの生活の復興が、これまで以上の課題として、さらには新たな課題として捉えられるようになってきている。例えば、復興住宅への移住が進むなかで、復興住宅での「コミュニティの欠如」や「つながりの希薄」が指摘されている（読売新聞2017.3.23「復興住宅「訪問者ゼロ」11%」など）。

東日本大震災の被災地では、家を失った住民らが仮設住宅から災害公営住宅（復興住宅）などへ引っ越し動きが進んでいる。ただ、復興住宅の入居者は高齢者の割合が高い傾向で、住民の見守りやコミュニティの再生など課題も指摘されている。（読売新聞、2017年3月5日「復興住宅『つながり』希薄」）

東日本大震災で被災した岩手と宮城両県で、災害公営住宅（復興住宅）での孤独死が仮設住宅と比べて大幅に増えている。2018年は前年の47人から68人となり、仮設住宅での孤独死が最多だった13年（29人）の倍以上に。復興住宅は被災地の住宅政策のゴールとされてきたが、新たな課題に直面している。（朝日新聞、2019年3月11日「復興住宅での孤独死が急増 昨年68人、入居後に孤立か」）

新たな住宅（復興住宅など）への移住が「ゴール」ではなく、新たな街で普通の生活を営めるような状態にすることが課題となっているのである。

2. 本研究の視点・目的

住宅という「ハード」の整備に加えて、そこで営まれる生活（「ソフト」）への支援の重要性を指摘すること、そしてそのような問題関心のもとで具体的な事例を考察することが本研究の目的である。

本研究が問題とするのは、新たな街で営まれる生活への支援、つまり「生活の復興」に対する支援である。生活の復興とは、住宅・仕事・教育・医療・福祉などが整備され、日常生活が支障なく送れるようになることであろう。それらに加えて、日常生活の基礎となる「地域コミュニティ」

や「地域の人のつながり」も重要な要素である。阪神・淡路大震災の被災者への調査を行なった京都大学防災研究所によると、「「すまい」の再建と、人と人の「つながり」の維持・豊富化の2つの要素が生活再建にとって重要な位置を占めることが明らかになった」という（林2002:17）。

以上のような問題関心にもとづいて、本研究は「生活の復興」として地域コミュニティや「つながり」の構築・再生を取り上げる。具体的には、宮城県石巻市と岩手県沿岸部の映画上映会（映画上映、上映に関連するイベントなど）を事例として取り上げ、「文化」を用いた活動（映画上映会）が地域コミュニティや「つながり」の再生・構築に対して、どのようなことを行っているのか、どのような役割を果たしているのかを明らかにすることが本研究の目的である。

上記のように「コミュニティの欠如」や「つながりの希薄」が指摘されているが、それに対して全く取り組みが行われてこなかったわけではない。行政の事業だけではなく、さまざまな組織・団体によって、さらには地域コミュニティが主導的な役割を担うことによって、コミュニティや「つながり」の構築・再生を目的とした取り組みが各地で行われている。しかしながら、取り組みの規模や継続性は地域によって違いが大きい。主導的な役割を担うアクター（組織・団体、個人）の存在の有無によっても大きく左右される状況である。本研究は事例調査であり、地域や事例の特徴などの限定的な要素があるため、被災地すべてに応用できる一般的な解決策を導き出すことはできない。しかし、事例を具体的に考察することによって、他の地域の「つながり再生」に活用できる知見やアイデアを提示することができると思う。

【研究方法・研究内容】

1. 研究方法

本研究は映画上映会・各種イベントの現地調査と関係者へのインタビュー調査にもとづく。岩手県宮古市・沿岸部は2013年から、宮城県石巻市は2014年から継続して調査を行ってきた。石巻市の上映会には2015年からボランティアスタッフとして運営・企画にも参加している。以下が、主な調査対象となる取り組みである。

- ・ 宮古市：宮古市内と沿岸地域の仮設住宅などでの巡回上映会、宮古市内での定期上映会（シネマ・デ・アエル）
- ・ 釜石市：復興住宅での定期上映会、年1回の映画祭
- ・ 石巻市：夏祭りでの野外上映会、定期上映会

2. 事例考察の視点

以上のような取り組みが具体的にどのような実践を行っているのか、そして地域コミュニティや「つながり」の構築・再生においてどのような役割を担っているのかを考察する。そしてとくに、映画上映会と地域コミュニティとの関係に焦点を当てる。

効果的な取り組みが行われるためには、さらには取り組みが継続性を持つためには、地域コミュニティと取り組み（本研究では「映画上映会」）とのあいだに協働的な関係が必要だと考えるからである。このような本研究の視点に関して、先行研究の知見を参照したい。

Koizumi (2015) は新潟市の「水と土の芸術祭」を考察して、アートプロジェクト（芸術祭）は市民主導型の文化と社会的な参加を促進することができ、市民参加や市民の協働を伴う文化プロジェクトは地域コミュニティの活性化に貢献できると述べている。

ソーシャリー・エンゲイジド・アート（Socially Engaged Art、以下 SEA と略す）は、芸術の制作において社会参加や社会への関わり（social engagement）に焦点を合わせる活動である。いわゆる「参加型アート」と称されるもののひとつである。SEA の制作活動において、参加者やコミュニティとの対話が重視される。参加者に「オーナーシップ（当事者意識）」を持たせるような工夫が行われ、協働的な参加が促される。Helguera (2011=2015) は、参加者やコミュニティとの相互作用によって、そして協働的な参加を促すことによって SEA は地域コミュニティ構築の役割を担うことができると主張する。

地域のアートプロジェクトと参加型アートにおいて、プロジェクトが地域を活性化するという一方向的な関係ではなく、参加者や地域コミュニティとの協働的な関係が地域コミュニティの活性化・構築につながるという指摘がなされている。このような知見を参照して、本研究では、「映画上映会と地域コミュニティの関係」に焦点を当てて事例を考察していく。

【調査結果】

1. 岩手毛沿岸部：宮古市、釜石市

(1) 沿岸部での巡回上映会

岩手県宮古市の映画館「みやこシネマリー」は、2011年5月に避難場所となっている小中学校での巡回上映会を始めた。2011年夏以降は仮設住宅が整備され始めたため、「仮設住宅の集会所とかで映画上映をやることで、皆さんを集めて交流の場にできたらいいな」と考え、集会所での上映会を増やしていった（石垣 2013）。巡回上映を行った地域は岩手県沿岸部の久慈市、野田村、普代村、岩泉町、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、住田町、大船渡市、

陸前高田市であり、2019年3月末で約700回になる。



図1 巡回上映会（2013年8月）

(2) 上映会への支援

一般社団法人コミュニティシネマセンター「シネマエール東北：東北に映画を届けよう！プロジェクト」を通じて、映画会社から映画作品提供の支援を受けてきた。グッズ提供、企画支援、車両燃料費の補助などもある。この他に、民間企業から車両（軽自動車）や上映機材（スクリーンとプロジェクター）の支援を受けている。映画と機材・車両は巡回上映の実現と継続にとって不可欠であるが、それ以外に重要なものとして上映会運営への支援がある。上映会の実施（現場の作業）は、シネマリーンの支配人とボランティア、地域の人々（個人、団体）の支援によって行われている。「いろんな地域で活動している NPO とか団体さんと協力してやっているというか、協力しないとできないんです。（略）震災後の巡回上映会の前にやっていた地域の上映会でも、その地域の団体と一緒にやらないと絶対成功しないんですよ」とシネマリーンの支配人は述べる。各地の生協、社会福祉法人、市民グループ、NPO 団体、仮設住宅の運営・管理を行うサポートセンター、個人のボランティアが上映場所の選定・日程調整、会場設営、宣伝、誘導などを行う。岩手沿岸部は広域であり、巡回上映のスタッフが限られているため（ほぼ支配人のみ）、その地域で活動する団体や個人の協力がなければ巡回上映自体が不可能であるといえる（石垣 2013、p.188）。

(3) 釜石市と宮古市での上映会

沿岸部の巡回上映会をきっかけに、2015年7月、釜石市で自主上映グループ（釜石シネクラブ）が結成された。復興住宅内の公民館で定期上映会を行い、2016年から年

1回の映画祭「釜石てっぱん映画祭」を開催している。

宮古市では2016年9月から定期的な上映会「シネマ・デ・アエル」が始まった。江戸時代に建てられた酒蔵を映画上映や文化イベントの場として活用し、交流の場所をつくるのが目的である。上映会やイベントはスタッフ全員が協働的・主体的に参加し、さらに観客・参加者、地域コミュニティ（事業者、団体）、地域外の個人・団体を巻き込んで、「交流」をつくる工夫が行われている。



図2 シネマ・デ・アエルの会場内



図3 石巻の野外上映会（2016年7月）

2. 宮城県石巻市

一般社団法人ISHINOMAKI2.0（以下、2.0）が夏祭りの野外上映と映画上映会を行なっている。震災後、“自粛”ムードが広がるなかで「今だからそこ楽しいことを」と野外上映会を開催した。津波でできた空き地にイスとベンチを並べ、子供たちが寝そべて映画を観られるように人工芝のシートを敷き、日没後、ビルの外壁に投影する。2016年以降は、旧北上川の中州にある中瀬地区で行い、600～700名の来場者を集める。そこは、津波で流出してしまうまで約160年続く芝居小屋・映画館の「岡田劇場」（1948年から映画館）があった場所だ。野

外上映会は映画という「楽しさ」を提供するものであるとともに、地震・津波がつくりだした被害（空き地）を創造的な空間へと転換しようとする試みでもある。

2012年12月から定期上映会「ISHINOMAKI 金曜映画館」（以下、金曜映画館）を行い、2018年3月までに37回（45作品）になる。金曜映画館では映画を上映するだけでなく、会場づくりの工夫、来場者プレゼント、トークや演奏、ワークショップなど「映画+α」の楽しさを提供しようとしている。



図4 金曜映画館（2017年2月）

【考察・今後の課題】

(1) 上映会の役割：「楽しさ」「集まる場」

岩手県沿岸部と宮城県石巻市で行われている映画上映会には、映画を観る「楽しみ」と「集まる場」（コミュニケーションの場、語り合う場）を提供する役割がある。

「楽しさ」は、映画を観る楽しさであり、他の観客と一緒に観る（映画館のような）楽しさである。また、上映だけではなく、映画に関連するイベント、トーク、ワークショップなど、「映画+α」の楽しさが提供されている。

映画上映会が「集まる場」となり、仮設住宅や復興住宅という新しいコミュニティのなかでコミュニケーションのきっかけが提供され、人のつながりを創出できる場となっている。上映会では「お茶っこ」（お茶飲み会）の用意をして、上映会後に話ができるようにしている。石巻の会場にはカフェスペースがある。映画上映会が、観たばかりの映画、日常生活、昔の街のこと、これからの街のことを語り合う場、新しい「生活の場」である復興住宅で挨拶する相手を見つけることができる場としての役割を担っていると考えることができる。釜石シネクラブは巡回上映会をきっかけとして新たにつくられたネットワーク（つながり）である。さらに、復興住宅内の公民館での上映会をきっかけとして、来場者（復興住宅の入居者）同士のコミュニケーションが生み出されている。

上映会では地域の組織・団体・個人を巻き込むような工夫が行われており、地域内外の人々や地域コミュニティとの協働的な関係が形成されている。詳しくは研究発表で考

察するが、地域コミュニティの協働的参加が「その場限りの上映会」を作り出している。さらに、協働的な参加があるからこそ、上映会が継続可能になっているともいえる。つまり、映画上映会が地域コミュニティとの間に協働的な関係を形成していることによって（あるいは地域コミュニティの協働的な参加があることによって）、映画上映会自体が持続可能になり、そして「集まる場」と「つながり」が持続可能になっていると考えることができる。

(2) 「つながり」「連帯」を考えるために

先行研究（アートプロジェクト、SEA）では、協働的な参加が地域コミュニティの構築・活性化につながると指摘されていた。それにもとづくと、映画上映会も地域コミュニティや「つながり」の構築・再生に、ある程度、役割を果たしていると理解することができる。では、それはどのようなコミュニティ／つながりなのだろうか。

現時点で、それは既存の地域共同体の代替となる「コミュニティ」であるといえる実証的な根拠はない。しかしそこには、市内外からの参加、一時的で限定的な参加と交流、復興住宅内での交流、地域コミュニティの組織・団体・個人の参加がある。したがって、地域共同体の代替としてのコミュニティではないが、映画上映会がなければ創出されなかったであろう新しい「つながり」や「連帯」があるということではある。それは既存のコミュニティを補完し、新しいコミュニティ形成を後押しするもの、新しいコミュニティの基盤になるものではないかと考えられる。

東（2017、p.196）は具体的な経験が「連帯」の基礎になると論じている。そして東（2017）が参照する Rorty（1989=2000）は、共同体には偶然性という特徴があるという。そして、連帯の感覚はローカルなものに向けられるときに最も強くなるが、連帯の感情は拡張できると述べる（同上、pp.398-401）。これらの議論を参照すると、「映画を観る（観に来る）」「集う」「交流・会話する」という具体的な経験を基礎として、緩やかで一時的・限定的だが、つねに広がり可能性をもつ「つながり」「連帯」がつけられると考えることができるだろう。

上記のように、復興住宅への移住がゴールではない。地域コミュニティや「つながり」が基盤となり、新しい居住地が「生活の場」になる。映画上映会がつくる「つながり」「連帯」は、新しいコミュニティづくりに重要な役割を担うことができると考える。新しいコミュニティづくりにおいて、映画上映会がどのような実践を行なっていくのか、どのような課題があり、どのように試行錯誤が繰り返されていくのか、そのプロセスを今後も考察していきたいと考える。

【引用・参考文献】

・ 東浩紀、2017、『観光客の哲学』ゲンロン。

- ・ Helguera, Pablo, 2011, *Education for Socially Engaged Art: A Materials and Techniques Handbook*. New York: Jorge Pinto Books. (=2015、アート&ソサイエティ研究センターSEA 研究会訳『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門：アートが社会と深く関わるための10のポイント』フィルムアート社。)
- ・ 石垣尚志、2013、「地方都市における映画文化と映画館」『文化政策研究』7、pp.183-194。
- ・ 石垣尚志、2015、「被災地の復興支援としての映画上映：岩手県宮古市と宮城県石巻市の事例から」『東日本大震災研究交流会研究報告書』pp.67-70。
- ・ 石垣尚志、2018、「被災地の復興支援としての映画上映(2)：岩手県沿岸部と宮城県石巻市の事例から」『第3回東日本大震災研究交流会研究報告書』pp.66-70。
- ・ 一般社団法人ISHINOMAKI2.0、2015、『石巻 STAND UP WEEK 2014 未来作りの見本市 報告書』。
- ・ 時事通信社、2019、「【図解・社会】東日本大震災8年・仮設住宅入居者の推移（2019年3月）」（https://www.jiji.com/jc/graphics?p=ve_soc_list, 2019.5.13）
- ・ Koizumi, Motohiro. 2015. "Creativity in a Shrinking Society: A Case Study of the Water and Land Niigata Art Festival." *Cities*, <http://dx.doi.org/10.1016/j.cities.2015.10.002>.
- ・ 林春男編、2002、『阪神・淡路大震災からの生活復興2001：パネル調査結果報告書』京都大学防災研究所。
- ・ Rorty, Richard, 1989, *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge University Press. (=2000、斎藤純一・山岡龍一・大川正彦訳『偶然性・アイロニー・連帯』岩波書店。)
- ・ 吉野英岐、2017、「災害公営住宅の生活実態と課題：釜石市での調査から」『第3回東日本大震災研究交流会研究報告書』pp.91-97。